

半島部マレーシアにおけるマレーシア人概念

——第 10 回 JAMS 総会 第 1 日目報告——

東條 哲郎*

1. はじめに

マレーシア研究において、マレーシア人アイデンティティーというテーマが議論に上って久しい。これは、独立の上で何をもってマレーシア人とするのかということが重要な問題となり、独立後もこの問題が国民統合という形となって、現在もなお強く残っているためである。

第 10 回 JAMS 総会は、2002 年 2 月 9 日(土)・10 日(日)に立命館アジア太平洋大学で開催された。同総会では 2 日間にわたって 4 本の自由報告と 1 本の書評がなされ、両日とも約 30 人が出席し、活発な議論がなされた。

本稿では、第 1 日目の、半島部におけるアラブ人を扱ったオマル・ファルーク氏(広島市立大学)の報告およびキリスト教徒とマレーシア語を扱った綱島郁子氏(マラヤ大学大学院)の報告と、篠崎香織氏(東京大学大学院)による書評セッションでの報告についてまとめ、半島部におけるマレーシア人概念というテーマで考察したい¹。

2. 報告・討論要旨

¹ 報告自体は全て自由テーマとなっており、このテーマは第1日目の研究会の意義を考察する上で筆者が便宜上まとめたものである。なお、東マレーシアに関しては第2日目に行われた山本博之氏の報告「マレーシアにおける民族概念:サバの事例より」を参照していただきたい。

2-1. オマル・ファルーク報告

まず、オマル・ファルーク氏の報告“The Arabs in Peninsula Malaysia: A Visual Survey”と、それについてのディスカッションについてまとめた。

報告者によると、アラブ人はマレー半島のマレー人コミュニティにおいて重要な位置を占めているサブ・エスニック集団であるにも関わらず、アラブ人の視覚的イメージははっきりしていない。そのため、他のマレー人との差異は明確でなく、コミュニティとしての概念化も難しい。

そのような問題関心のもと、報告者はまずアラブ人の定義について考察した。アラブ人の定義は P. H. Hitti や H. A. R. Gibb などにより様々な形でなされているが、どれか一つの定義にまとめることは出来ない。そのため、マレー半島という文脈の中で定義していく必要があるとし、本報告においては、アラブ人を「地理的な意味でのアラブ地域を起源とし、彼らのアイデンティティーが父系的な血統の中で維持されている人々」と定義している。

次に、この定義のもとで報告者はアラブ人を出身地、氏族、出生地等の様々な点から 33 項目に分類し、その分類化された項目の一つないし

* 東京大学大学院人文社会系研究科・修士課程

複数の項目を同一の人間が所有していることを指摘した。

さらに、これらの定義のみではアラブ人の多様な実態を把握することは出来ないとし、1.出身地であるハドラマウト、ワディ・ドアン、ムカッタ、2.ペナン、3.ムアール、バトゥ・パハット、クランタン、4.シンガポールの各地におけるアラブ人について、写真を用いて説明を行った。それによれば、アラブ人は混血や複合的なアイデンティティーの中で公的に組織化される、ないしは結婚等の非公式的な社会的な関係においてコミュニティとしてはっきりと現出してくるとしている。

報告者は最後にシンガポールでの事象をあげ、シンガポールにおいては、より狭い地理的な空間で生活しているなどの理由で、マレー半島においてよりもアラブ人のコミュニティ・アイデンティティーがはっきりとしているとまとめている。

この報告に対し、フロアから様々な意見が出された。以下では議論の要点と意義についてまとめたい。

まず水島司氏より、20世紀初頭にアラブ人とスルタンとの関係、特に宗教教師としてのアラブ人の役割がどのような影響を与えているかという疑問が出された。これに対し報告者は、プルリスやケダーにおいてはある程度王権との結びつきが認められるが、これらはあくまで個人的なものであり、コミュニティ全体との関係はほとんどなかったと回答した。むしろ宗教以外の要素、すなわちビジネスなどの関係の方が特にシンガポールやペナンの場合は強かったのではないかとい

うコメントがなされた。

また、永田淳嗣氏より、アラブ人以外のマレー人にとってアラブ人というカテゴリーはより狭いものであり、アラブ人内部の多様性は重視されないのではないかとした上で、マレーシアにおけるアラブ人コミュニティを考える場合にはアラブ人以外のマレー人からの見方も考えた方が良いのではないかと指摘がなされた。これに対し報告者は、本報告がアラブ人コミュニティを内部から見た報告である以上、このようなカテゴリーが不可欠であること、また、外部から見た場合には指摘のとおりであろうとのコメントがなされた。

本報告は、従来の研究においてひとまとめにくられる傾向にあったマレー人という集団を、アラブ人というサブエスニックグループを詳細に見ていくことでより詳しく見ていく必要があるという面で意義深いものである。また、従来あまり使用されてこなかった写真資料を主要な資料として利用することで、より視覚的に理解していこうという意味で実験的である。もっとも、今回の報告においては、その写真資料がどこまで有効であったかという疑問が残った。それは、個々の写真の資料的な位置付けがほとんどなされていなかったことが一因として挙げられる。もちろん、限られた時間のなかでの報告であったために致し方ない面もあるが、写真資料を中心に報告が行われている以上、その写真についての文章等での補足が不可欠だろう。

だが、写真を用いること自体は、報告者が問題関心の項目で挙げている通り、視覚的・実態

的に研究を行う上で非常に有効であり、資料の少ないマレーシア研究において、資料としての意義は大きくなるであろう。

2-2. 綱島報告

次に、綱島郁子氏の報告「半島マレーシアにおけるキリスト教とマレー(シア)語の関係——“禁止用語”に関する州法をめぐって(2)——」についてまとめたい。

氏の報告は、第9回 JAMS 総会で行った同題での報告を発展させたものである。

マレーシアにおけるキリスト教徒とイスラムとの接点が、アラビア語借用の宗教語彙をキリスト教において使用してよいのかそれとも禁止するかという点において表面化してくるのではないかと、という問題関心のもと、報告者は各州によって出されている「禁止用語」に関する州法についてまとめている。

次に報告者はキリスト教会側から出されている反論およびそれに関する報道についてまとめた。その中で報告者は、政府に対し抗議を行っているのは半島部のキリスト教指導者のみであり、それに関する報道が英語紙とマレー語紙とで大きく異なっていること、そのため、州法の有効性とそれに関する抗議のどこまでが事実なのかという点を注意深く見ていく必要があるとしている。

報告者はさらに、この問題は宗教・言語問題を越えてマレー人対非マレー人という社会構図にも合致しており、これが問題を複雑化している点にマレーシア固有の特性が現れているのではな

いかとまとめている。

同報告に対し、まず西尾寛治氏より、現代マレーシア社会における「禁止用語」研究の位置付けを明確化する必要があるとの指摘がなされた。その上で、報告者が述べた宗教問題がマレー人と非マレー人との対立を明確化しているのではなく、むしろそれ以前からあるエスニック問題が宗教的なものを通じて表面化してきているのであり、さらに歴史的に考えるとそれは17世紀のマレー世界にも通じる問題点であって、顕著に表れて大きな政治・社会問題となるのが戦後国民国家であるとのことである。

また、山本博之氏より、マレーシアにおいてキリスト教の禁止用語が問題になってくるのは半島部出身者よりむしろサバ・サラワク出身者ではないかとの指摘がなされた。これに対し、報告者の挙げた内務省の通達がサバ州・サラワク州に対して出されていることから明らかであるとの回答がなされた。

本報告は、マレーシアにおける民族問題を捉える上で重要な見方を提示しているものである。従来のマレーシア研究において、民族対立が扱われるのは政治・経済、教育という分野に限られていたといっても過言ではない。これは、イスラムについての議論を公の場ではできないという憲法上の規定があることが一つには影響を与えている。だが、視点を変え、キリスト教という問題から研究を行うことで、マレーシア内部において中々表面に出てこない宗教問題が明確になり、民族問題をより複合的に理解していくことにつな

がるのではなかろうか。

2-3. 篠崎報告

第1日目は、自由報告の後、書評セッションが行われた。書評の対象は金子芳樹著『マレーシアの政治とエスニシティー——華人政治と国民統合——』²、評者は篠崎香織氏であった。著者の金子氏も出席し、議論に加わった。

まず、評者による内容紹介とその検討がなされた。内容紹介はここでは省きたい。評者によって批判された第1点目は、同書のエスニシティーをめぐる理論についてであった。すなわち、同書は冒頭において原初主義アプローチより手段的アプローチを重視すると宣言しているにも関わらず、本書の論理は「言語的・教育的背景によって生じた文化に対する「原初的愛着」の違いが華人社会内部の政治志向性を左右した」というもので、実際にはほぼ完全に原初主義アプローチをとっている。エスニックな問題を見る上で両方のアプローチを考慮すべきという立場はもちろんありうるが、いかなるケースにいずれが重要になるかを一貫した論理に基づいて実証的に論じることが必要とされる、と評者は指摘している。

第2点目は、マレーシア華人の政治的志向性による分類についてである。著者はマレーシア華人を「英語派」と「華語派」に2分しているが、評者は現実にはそれ程理念的に分類できないのではないかと批判した。評者は指導者レベルで

の両派を歴史的に検討し、さらに指導者＝英語派、大衆＝華語派という図式も再検討する必要があるとしている。また、同書では「華人」として共通認識を持つに至る過程の議論が不十分であるとしている。

この批判に対し、著者はまず、論文を書く上で問題関心として1969年の暴動をあげ、これが体制変換の契機になったのみならず1980年代末においてさえ強い影響を残しているのは、エスニックな壁が既に存在していたのではなく、この事件を通じてその壁が高くなったためではないかとし、個々のコミュニティの状況を考える上でまず華人から見えていったとしている。

同書は、このような関心のもと、縦軸に華人の属性や政治的志向性の相違、横軸に政治学的視点を置き、コミュニティ内部および他のエスニックグループとの間の政治力学や政治の方向性について考察していこうとしたものであり、批判の対象となった点に関しては、原初主義と手段主義の両方を使っていこうとしたものであるとしている。

2点目、華人の分類の妥当性に関しては、著者自身も非常に迷っていることを明らかにした。ただし、同書においては、華人が必ずしも内部で一体化しているのではなく、政治の場での選択も各々異なってきたことに着目し、二つに分けてその対立を分析するのではなく、むしろいろいろな属性の軸が存在し相関している中で二つの極が生じ、その極に注目して研究を進めたのだと説明した。

² 2001年3月 晃洋書房

このような批判と反論を踏まえ、さらにフロアからのコメントを交えて議論が進められた。まず第1点目の原初主義と手段主義の両アプローチに関して、立本成文氏より、研究者と当事者の見る実態が異なることを受け入れるのか、もしそうなら研究者の見方によって当事者の意識を変える可能性があることを認めるのかとの質問がなされた。この質問に対して著者は、当事者の文言のみでは捉えきれない問題が数多くあり、研究者としてはそれらを統合的に見ていく必要があるとした。

第2点目の華人の分類に関しては、山本氏より、華人アイデンティティを所与のものとしなないということの意味は、華人という枠は存在したが内部での一体性の認識がなかったのか、それとも華人という枠自体も存在しなかったのかとの問いが出された。これに対し著者は、60年代以前は両方とも存在していたものの非常に弱いものであったが、それが契機(=暴動)を経ることによって華人としてのアイデンティティが確立していったと回答した。

また、山本氏から評者に対しては、二分法によらずに具体的にどのように華人を捉えうるのかという問いがなされた。これに対し評者は、各個人を詳しく論じていくことによって各々の政治志向性を分析していくことができるだろうと回答した。

さらに左右田直規氏より、60年代にあった華人の分類を今日的に考えるならば、独立期には強くあった英語派・華語派の境界線が徐々に薄まってきたと考えられるのではないかと指摘がなされた。

さらに、評者による批判以外にも同書に対して様々な意見が出された。永田氏より、人種暴動に対する記憶をブミブトラ政策浸透後の華人社会で教訓としてどのように生かしていったのかが重要ではないかとの意見が出された。これに対して著者は、政治に対して具体的にどのような影響を与えたのかという点は重要であり、課題ではあるが、具体的な方法は不明であると回答した。通説としては、華人は政治から離れて経済に特化していき、その方向性が時期によって変化していると述べた。

JAMS 総会において書評セッションが設けられたのは今回が初めてである。著者を迎えての書評は議論が深まり、意義深いものであった。今後も可能な限りこのような形での書評セッションが行われることを期待したい。

3. 考察

以上の報告・書評を、「半島部マレーシアにおけるマレーシア人概念」とまとめて考察したい。

マレーシアにおける民族問題と国民統合は、ここで述べるまでもなく、これまで数多くなされてきた。その中で今回の報告の意義を求めるとすると、エスニック集団内部への言及があげられる。オマル・ファルーク氏のアラブ人に関する研究は、マレー人のサブ集団であるアラブ人においても、内部を詳細に考察していくと一枚岩ではないことが指摘された。従来の研究において、コミュニティー内の分化が言及される際には政治対立とみなされる傾向が強かった。特にマレー人の場合

は UMNO と PAS という 2 項対立に還元された議論が多い。だが、移民集団においては出自や来歴などが自己のアイデンティティーを決定する大きな要因となる場合が多い。もちろん、本報告はアラブ人社会という個別の事例を扱っているため、普遍的に全てのマレー人社会に言えるかどうかは疑問が残る。ただし、マレー人の多くが歴史的に考えると移民である以上、このような視点は重要である。

金子氏の著作に対する書評とそれをめぐるディスカッションにおいて論点となった華人社会の多様性に関する議論では、そのような多様な社会集団が現れてくる場としての政治の意義について再認識させられた。マレーシア人というアイデンティティーを確立していった独立期において、華人政党は国民統合において重要な役割を果たしてきた。69 年の暴動以後、国民統合における政党の役割はどのように変化したのか。そして、政治から乖離していく華人にとって、マレーシア人であるということはどうに現れてくるのか。著者も述べている通り、今後考えていかねばならない課題であろう。

また、日本人研究者がマレーシアにおけるエスニシティについて研究する際に、問題となるのが現地研究者との立場の違いであろう。これは、書評セッションの際に西尾氏から出された疑問である。この疑問に対し、金子氏は政治的制約のある現地華人研究者に出来ない研究をしていくことができるのではないかと答えている。そのような事例として、綱島氏の研究が挙げられるだろ

う。キリスト教に対する政策とその対応に関する氏の研究は、現地研究者にとって最も制約の大きい宗教という側面からエスニシティ問題を扱っており、新たな視点を提供している。

一方で課題も存在している。その一つが歴史的考察の欠如であろう。独立期およびそれ以降の半島部におけるエスニック問題研究において、多くの研究は同問題の源泉がイギリス植民地期における *divide and rule* にあるとしながら、それ以上の考察をしている研究は管見の限り極めて稀である。歴史的に考察した場合、多民族社会における統合も *divide and rule* 政策も植民地時代や独立後に独特の問題ではなく、港市国家においてもこのような問題は見られる。では、そのような時期における問題と、独立以降の国民国家における問題は根本的にどのように異なっているのか。そして、それを研究していく上でどのような視点が必要であるのか。今後の課題の一つであろう。

今回の総会において提起・議論されたのは、マレーシアにおける国民問題に関する研究をどのように行っていくのかという点であると考えられる。その中で、最新の研究をディスカッションしていく意義は大きい。このような議論ができるような研究が今後さらに数多く出されてくることを期待したい。